

令和元年8月31日現在

機関番号：12101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26381175

研究課題名(和文) 英語ディスカッション力育成のための指導と評価改善の組織的試み

研究課題名(英文) Improving Discussion Instruction and Assessment in Junior High School EFL Lessons

研究代表者

齋藤 英敏 (Saito, Hidetoshi)

茨城大学・教育学部・准教授

研究者番号：20318695

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：英語ディスカッションは、アクティブ・ラーニングの中核となる学習活動にも関わらず、文部科学省(2017)の大規模な調査でも、まだまだ、指導・評価における利用は極めて低いといえる。一方、茨城県では20年間にわたり全県レベルで英語ディスカッション指導が推進され、それをベースにした大会(茨城英語インタラクティブフォーラム中学部門)が行われた。本研究ではそれに関する調査を行い以下を提案する。1)茨城英語インタラクティブフォーラム中学部門の新評価方法を作成し、妥当性を検討し、それをベースに授業でも使用できる評価方法を提案する。2)中学校英語ディスカッション力育成の指導方法を提案する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

複合的なデータ(評価データ、アンケート、外部テスト)などから、新しいディスカッション評価のルーブリックの妥当性は支持を得ることができた。特に実際の指導を行っている教員から高い支持を得ていることは、意義の高いところである。また、指導方法に関しては、同様に多くのデータ(インタビュー、ビデオ、参加者の報告)を基盤にして、合計で11の指導原則を環境面、指導面に関して抽出することができた。この原則を利用することで、英語授業でのディスカッション指導を、より確実に実施できる可能性があることは高い意義を持つと考えられる。

研究成果の概要(英文)：English discussion plays a pivotal role in active learning. Despite its significance, however, junior and senior high school teachers seem to hesitate to make use of discussion in their English language instruction, according to a recent large-scale survey conducted by the ministry of education (2017). Ibaraki Prefecture has in the last 20 years nurtured English discussion instruction and offered the prefecture-wide discussion contest for junior high school students. This research has examined the prefecture-wide efforts of promoting English discussion instruction. In particular, the study has completed: 1) constructing the new assessment rubrics of the discussion contest and examining its validity evidence; 2) proposing teaching principles of English discussion instruction in junior high schools.

研究分野：英語教育

キーワード：英語ディスカッション指導 英語ディスカッション評価 やりとり

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

当初の本研究の目的は茨城県の中高生の英語ディスカッションコンテストである英語インタラクティブフォーラム(以下IEF)の評価方法を改善し、学習・指導用の評価も作成しそれに基づいた実践を行い、そのような実践をまとめ広く一般に公開することを目的としていた。しかしながら、評価を中心とした指導法に関する調査は限界が感じられたので、ディスカッション指導方法の調査に切り替え、あくまで評価は指導の補助という位置づけにした。

### 2. 研究の目的

1) 茨城英語インタラクティブフォーラム中学部門での新評価方法を作成し、それをベースに授業でも使用できる評価方法を提案する。

2) 中学校英語ディスカッション力育成の指導方法を提案する。

### 3. 研究の方法

(1) 研究目的 1) に関して

ループリック作成 いわゆるスタンダードセッティング型の方法を用いて行った。

54名分のビデオに1名につき7から8名の教員がコメントを添付し、元となる仮ループリックで生徒を数値順に並べ、コメントをベースに境界を決める。ビデオを見返し、境界点を確認し、ビデオにつけられた記述子をベースに仮ループリックを改訂する。その後話し合い等を通して、新ループリックの内容的妥当性を検討した。

統計的データはH26年から28年までの実際の県大会評価データをラッシュ分析を行い検討した。またアルク教育社 TSS (モノログ・スピーキングテスト) を同大会参加者の一部が受験し、相関を見ることとした。

実際の県大会評価者からアンケートを取り、新ループリックの使用感の調査を行った。

全県の159名の教員からアンケート調査を行い、新IEF評価方法に関して、印象や指導評価への影響の調査を行った。

(2) 研究目的 2) に関して

県内の中学校教員5名に参加協力を依頼し、それぞれ計8回程度ずつ、授業参観を行いビデオ撮影とインタビューを教員、生徒などから行った。データはコーディングを行い、質的に分析をして、それをベースに指導方法の原則を作成することとした。

研究目的2)に参加した5名教員と高等学校教員1名に、ディスカッション指導方法についての論文の執筆を依頼し、その原稿も指導方法提案原則のベースの一部に利用した。

### 4. 研究成果

研究目的1) に関して

県内での13名の中学校教員・3名の指導主事他の計18名による評価作成委員会が作られ、検討を行い、最終的に三項目五段階の評価表が完成した。これを用いて別のデータを委員が再び評価を行い、ラッシュ分析では問題がないことが確認された。評価者トレーニング後、H26年度IEF(Interactive English Forum)県大会で最初に使用し、2年生(通常枠)、H27年度は3年生(通常枠)、H28年度はB部門(帰国子女等枠)からデータを入手しそれぞれ分析を行った。

外的構造妥当性(基準関連) H26度は二年生のIEF県大会参加者のうち有志26名がアルク社のスピーキングテストを受験した。このテストはモノログ試験であり、「インタラクティブ」のタスクはない。しかし、スピーキングの評価であるので、IEF評価と中程度の相関が想定された。結果は $r=.520$  ( $p.<.00$ )であり、予想通り中程度の相関であった。つまり、外的構造妥当性の一部は支持された。H27年度は3年生、H28年度はB部門の調査も行ったが、いずれも中程度の相関が得られており、IEF評価はスピーキング・モノログとは関連した能力を測っているが、異なる能力を測っていることが確認できた。

帰結的妥当性 評価者アンケート結果を旧評価を使用したH24年度(12名)と新評価のH26年度(11名)で比較を行った。旧版では8名(66%)が項目に関して明快でないと感じ、7名(58%)がスケールに関する不適切な回答をした。新版では項目・スケールに関して問題があると感じたものはなかった。また、H26年度評価者のうち旧版を使用したことのある8名全員が新版のほうが使用しやすいと答えている。このように帰結的妥当性は一部支持された。その後、一般の教員に対して、トレーナーの講習を行い、大会前に各地区で評価者のトレーニングを行うことになった。このような準備を行うことで、各地区大会での評価も事前の評価基準確認と理解により安定したものになったことが考えられる。ただし、各地区大会での

評価者のアンケートは入手していない。

一般化に関する妥当性 高い内的信頼性（ラッシュ分析）が生徒に関しては三つのグループから得ることができた（表1）。項目に関してはモデル適合に問題はなかったが、2、3年生では3つの項目の違いが明確でなく、ラッシュ項目信頼性が低いことが明らかになった。これは県大会であり、大きな能力差がなく項目ごとの違いを見極めるのが困難だったことが考えられる。しかしながら、B部門ではこのような問題がない。B部門では幅広い能力の参加者がいるため、高い信頼性係数が得られている。B部門のように個々の参加者のパフォーマンスに差が開く場合は三項目使用に高い意義が得られている。結果として、ループリックに問題がないことは、安定した完全合致率、不適合生徒の少なさからもわかる。つまり、ループリック自体の問題というよりは、参加者の能力差の問題によるものと考えられた。

表1 ラッシュ分析による信頼性係数・不適合生徒数・評価者完全合致率

	ラッシュ信頼性係数 (Strata)			不適合 生徒数	評価者完全 合致率	コメント
	評価者 (n = 18)	項目 (k = 3)	生徒			
2年生 (n = 36)	.67 (2.21)	.00 (.33)	.84 (3.43)	2	41.4%	分散が低い
3年生 (n = 36)	.63 (2.08)	.00 (.41)	.90 (4.27)	1	48.5%	分散が低い
B部門 (n = 42)	.93 (5.38)	.95 (6.21)	.94 (5.58)		46.4%	分散が高い

決定に関する妥当性 生徒の弁別には問題がないが、スコアの公開などの透明性や参加者へのフィードバックは行われておらず、教育的な視点からは、評価結果の利用に関しては疑問を残している。

波及効果 大規模な教員アンケートではおおむね肯定的な意見が得られている（159名のうち104名が新評価のほうが良いと回答）。生徒からのデータは入手していないが、回答した教員のうち110名が生徒とループリックの共有をしていると回答した。またいくつかの問題点もその結果から得ることができた。例えば、「量的」な面をループリックが強調しているように見える点、また方針としてコミュニケーションを評価するという点自体に疑問を感じる、などの点である。

研究目的 2) に関して

インタビューデータ、ビデオ観察データ、参加者教員による論文、先行文献などを参考にし、次のような指導原則を提案することとした。

環境面の基本原則

- a. グループサイズはトライアド（3人）を基本にする
- b. 話せる雰囲気を作る
- c. 学習者の熟達度レベル（等質・異質）を考慮する
- d. 学習コミュニティづくりをする

指導面の基本原則

- e. ペア活動を通して小さな技能を身につける
- f. 初期はグループで話す順番を決める・役割を決める
- g. 始める前に、ディスカッション原則を理解する
- h. 足場かけ（補助）を利用し徐々に自由度を上げる

- i. トピックは授業のトピックと他のトピックを併用する (BICS から CALP へ)
- j. 話し終わったあと振り返る
- k. 話が続けるためのコツに気づく

この中でも特に環境面の1点目(a)、指導面の3点目(g)は茨城県での特徴であり、これから広めるべき考え方である。また指導面での4点目(h)、5点目(i)、6点目(j)はシステムティックな指導をするのに、必要な考え方であり、教員間での高い理解が望まれる事項である。

いずれも、現在執筆中の書籍に例を挙げながら掲載する予定である。

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計3件)

Saito, H. (2016). Validity and reliability. *JLTA Journal* (日本言語テスト学会), 19 (Supple), pp. 35-40. (査読無)

Saito, H. (2017). Effects of preparation and use of keyword lists on a classroom story-telling test. *JALT Journal* (全国語学教育学会), 39, pp. 5-28. (査読有)

Saito, H., & Inoi, S. (2017). Junior and Senior High School EFL Teachers' Use of Formative Assessment: A Mixed-Methods Study. *Language Assessment Quarterly* (Routledge), 14, pp. 213-233. DOI 10.1080/15434303.2017.1351975 (査読有)

### 〔学会発表〕(計6件)

Saito, H. (2014). The use of formative assessment in Japanese middle school classrooms. 76th Annual Meeting of National Council on Measurement in Education, Philadelphia, PA, USA.

Saito, H. (2015). Junior and senior high school EFL teachers' practice of formative assessment: A mixed method study. 2015 Language Testing Research Colloquium, Toronto, Canada.

Saito, H. (2015). Initial evidence on the validity of the assessment of the junior high school three-person discussion. 日本言語テスト学会 第19回全国研究大会, 中央大学.

齋藤英敏(2016). 10年先を見据えた「強い」中高英語教員養成コア・カリキュラムに. 第22回日英・英語教育学会 聖徳大学 松戸キャンパス.

Saito, H. (2017). Junior and senior high school teachers' formative assessment practice in Japan. 2017 Korea English Language Testing Association Conference, Hankuk University of Foreign Studies, Seoul, Korea.

Saito, H. (2018). Assessing formatively in CLIL-oriented junior high EFL lessons in Japan. Assessment for Learning Symposium, 東海大学, 高輪キャンパス.

### 〔図書〕(計1件)

Saito, H. (出版予定). Assessment for Learning in the Emerging CLIL-Oriented Junior High Schools in Japan. In D. Leontjev & M. DeBoer (編者), "Assessment for learning in CLIL classrooms: Conceptualisations and practical applications." New York, NY: Springer. (32頁).

### 〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況(計 0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6．研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：根岸 純子  
ローマ字氏名：Negishi Junko  
所属研究機関名：鶴見大学  
部局名：文学部  
職名：准教授  
研究者番号(8桁)：10708960

### (2)研究協力者

研究協力者氏名：  
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。